



## もくじ

展示紹介  
なぜか忠臣蔵 藤沢のヒーロー小栗判官と江戸歌舞伎 ..... P1  
小栗判官と藤沢 ..... P2  
小栗判官から「忠臣蔵」へ ..... P3  
早稲田大学演劇博物館の役者絵コレクション ..... P4  
浮世絵こぼれ話 18 変わった経歴の浮世絵師 楊洲周延 / 浮世場なれ ... P5  
二代目オニカゲ学芸員のページ①  
浮世絵の額装：藤澤浮世絵館マット合わせ編 / 編集後記 ..... P6

# なぜか忠臣蔵

## 藤沢のヒーロー小栗判官と江戸歌舞伎

会期 2023年11月14日(火)～12月17日(日)



【図1】歌川国芳「義士本望を達して仙国寺へ引取固の図」資料番号：100-1487～1489  
(後期展示予定)早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵

人形浄瑠璃や歌舞伎の演目として有名な『<sup>かなでほんちゆうしんぐら</sup>仮名手本忠臣蔵』(通称「忠臣蔵」)は、江戸時代の元禄14-15年(1701-02)に起きた<sup>あこうろうし</sup>赤穂浪士による仇討ち事件を、南北朝時代が舞台の軍記物語『<sup>たいへいき</sup>太平記』に<sup>かたく</sup>仮託した物語です。赤穂浪士の仇討ち事件は、「忠臣蔵」のほかにも様々な人形浄瑠璃や歌舞伎の題材となり、江戸時代の人々の心をつかみました。その物語を作り始めた頃には、同じく江戸時代に人気のあった<sup>おぐりはんがん</sup>小栗判官の物語に仮託した演目もありました。

小栗判官の物語は藤沢の古刹・<sup>つぼうち</sup>時宗総本山藤澤山無量光院清浄光寺(遊行寺)との関わりが深く、江戸時代には「藤沢といえば小栗判官」と連想されていました。そのため、小栗判官は藤沢宿を主題とした浮世絵に多く描かれました。

本展は、演劇資料を数多く所蔵する早稲田大学坪内博士記念演劇博物館からもご協力をいただき、浮世絵を通して「忠臣蔵」の魅力に触れていただくとともに、小栗判官の物語が「忠臣蔵」の成立する過程で仮託に利用されていたことに着目し、藤沢と小栗判官物語のつながりを当館ならではの切り口で紹介します。

# 小栗判官と藤沢



【図1】落合芳幾「小栗一代記」安政3年(1856)

## 小栗判官の物語とは

小栗判官の物語は、語り物の芸能である説経節として戦国時代に生まれ、広く流布しました。その元になったのは、室町時代の軍記物語『鎌倉大草子』に記された説話で、足利家に滅ぼされた常陸の武将、小栗満重の息子、助重が主人公です。歴史上実在した満重

と助重の二人が小栗判官のモデルになっています。

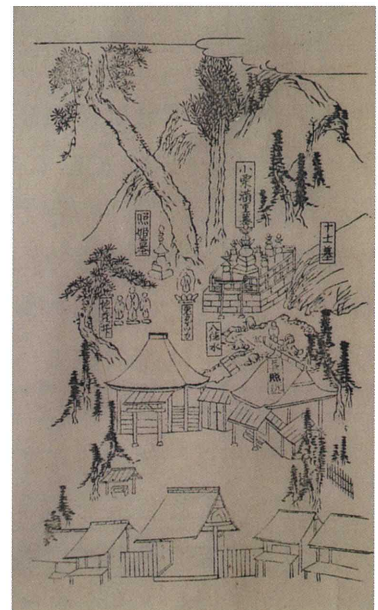
小栗判官の物語には様々なバリエーションがありますが、基本的な流れは小栗判官が妻・照手姫の実家である横山家に殺され、蘇った後、横山家に復讐するという話です。江戸時代には『世界花小栗外伝』や『姫競双葉絵草紙』など歌舞伎や人形浄瑠璃の演目の題材になりました。

## 小栗判官と藤沢

小栗判官と藤沢が結びつけられるようになった背景には、物語で重要な役割を果たす遊行上人と遊行寺の山内寺院である長生院の存在があります。

説経節を由来とした多くの小栗判官の物語では、小栗判官は十人の家来と共に死んで地獄に落ち、家来の嘆願に応えた閻魔大王の計らいで遊行寺の近くで蘇ります。しかし、蘇った小栗判官は元の姿から変わり果て、痩せ衰えた餓鬼阿弥のようでした。小栗判官を助けた遊行上人は閻魔大王が持たせた「熊野の湯の峰(現和歌山県にある温泉)に入れば元に戻る」という旨の札を見つけ、小栗判官を土車(手曳車)に乗せます。そして、「この者を曳いたら供養になる」と札に書き足します。この遊行上人の書き足しにより、小栗判官は様々な人に曳かれ、熊野の湯にたどり着くことができます。この話とは別に、小栗判官とは知らずに照手姫が土車を曳いて熊野に行くものや、前述の『鎌倉大草子』で毒殺されかけた小栗助重を遊行上人が助けるものもあります。このように、遊行上人は小栗判官の窮地を脱するきっかけとなるキーパーソンでした。

また、長生院には独自に小栗判官の物語が伝わっています。江戸時代から昭和頃まで長生院によって刊行されていた『小栗略縁起』によると、相模にやって来た小栗満重は横山家に毒殺されますが、遊行十四代大空上人によって蘇生され、熊野の湯に浸かって復活します。その後、満重と照手姫は夫婦となります。満重の死後、弟(史実では息子)の助重が満重と家来の墓を建て、照手姫は剃髪して長生尼になり、満重たちを供養したとされています。長生院には現在でも満重、照手姫、十人の家来、鬼鹿毛(小栗の愛馬)の墓と伝えられる墓石があります。



【図2】長生院刊行「小栗略縁起」(部分)江戸末期

## 小栗判官から「忠臣蔵」へ

歌舞伎・人形浄瑠璃の名作とされる『仮名手本忠臣蔵』(以下、「忠臣蔵」)は、<sup>あさのたくみのかみ</sup>浅野内匠頭と<sup>き</sup>吉良上野介の対立による刃傷事件に端を発する「赤穂事件」という史実を題材にした様々な劇の集大成とされる作品です。人形浄瑠璃として寛延元年(1748)8月に初演され、同年12月には歌舞伎にもなりました。「忠臣蔵」は赤穂事件を『太平記』に仮託、つまり設定を借りていることが特徴の作品です。しかし、「忠臣蔵」のみではなく赤穂事件劇は、ほとんどの演目がなにかに仮託しています。これは江戸時代には武家社会の時事問題を扱った演目を上演することが禁止されていたため、あくまで別の話だという建前が必要であったからです。多くの演目は『太平記』を採用しましたが、「忠臣蔵」が成立する過程の草創期には、「曾我物語」や藤沢に関わりのある小栗判官の物語に仮託した演目もありました。

小栗判官の物語に仮託した演目としては、宝永7年(1710)6月に上演された歌舞伎<sup>おにかげ</sup>『鬼鹿毛武蔵鑑』、同年7月に上演された浄瑠璃<sup>おにかげむさしあぶみ</sup>『鬼鹿毛無佐志鑑』、そして享保17年(1732)10月に上演された浄瑠璃<sup>ちゅうしんこがねのたんざく</sup>『忠臣金短冊』の3つが挙げられます。このうち歌舞伎『鬼鹿毛武蔵鑑』の内容は失われていますが、タイトルの類似から、浄瑠璃『鬼鹿毛無佐志鑑』はその影響を受けていると推測されます。現在、内容を知ることができるこの二つの物語では、小栗判官と横山大膳(横山家一門)の対立による刃傷事件として描かれていますが、その対立の原因である小栗判官による照手姫との強引な婚姻については、特に記載がなく進行していきます。これは、江戸時代には「小栗判官物語」の小栗判官と横山大膳の対立関係は、原因に触れるまでもない当然のこととして、認知されていたと推し測ることができます。この誰もが知る対立関係の図式を利用することで、赤穂事件の浅野内匠頭と吉良上野介の対立関係を小栗判官物語に移植していくことが容易であったと思われます。

『鬼鹿毛無佐志鑑』と『忠臣金短冊』は、小栗判官と横山大膳の対立関係以外にも小栗判官の物語の要素を取り入れています。『鬼鹿毛無佐志鑑』では照手姫が小栗の遺体を土車に乗せて藤沢の遊行寺まで運ぶ場面があります。これは小栗判官の物語において地獄から餓鬼阿弥の姿で蘇った小栗判官を乗せた土車を照手姫が曳いたというエピソードからきています。一方、『忠臣金短冊』では照手姫が登場せず、小栗判官(婿)と横山大膳(舅)の関係がなくなっています。そのため、先行作品の『鬼鹿毛無佐志鑑』と比べると小栗判官の物語の要素は薄くなっていますが、小栗判官の愛馬の荒馬・鬼鹿毛や小栗判官の菩提寺として遊行寺が登場します。「忠臣蔵」が完成していく中で小栗判官の物語の要素は継承されなかったものの、演目のオリジナルの登場人物や演出は「忠臣蔵」のベースを形成する一要素となっています。

「忠臣蔵」は先行作品の演出や登場人物などを継承した上で、新しい趣向を加えて別の作品に仕立て上げられました。例えば『鬼鹿毛無佐志鑑』と『忠臣金短冊』には、「忠臣蔵」の七段目で<sup>おお</sup>大星由良之助が敵を欺くため遊郭で遊ぶ場面につながる描写が見られます。さらに、『忠臣金短冊』では「忠臣蔵」における六、七、九段目の基礎になる要素、仇討ちのため身を売る女性、由良之助の遊郭遊び、敵の屋敷の見取り図を由良之助に託す人物などがあります。このように「忠臣蔵」は、『鬼鹿毛無佐志鑑』、『忠臣金短冊』など小栗判官の物語に仮託した演目も含む先行作品の優れた部分を取り入れているからこそ、赤穂事件劇の集大成として完成された演目とされています。

# 早稲田大学演劇博物館の役者絵コレクション

児玉 竜一（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 館長）

早稲田大学演劇博物館は、約47,500枚に及ぶ浮世絵を所蔵している。

そもそも、1928年に本館が設立されたのは、坪内逍遙が古稀を迎えた祝賀と、シェイクスピア全作品の翻訳を完成させた、その偉業をたたえてのことであった。が、逍遙自身はすでに大正年間から、演劇資料を一堂に会する博物館構想を抱いていて、1923年の関東大震災を契機として、その実現に向けて具体的に構想を始めたという経緯がある。

本年2023年が100周年となる関東大震災によって、歌舞伎関係の資料がどれほど失われたかということについては、本館二代目館長である河竹繁俊<sup>かわたけしげとし</sup>によって、1923年12月という震災からわずか3ヶ月の段階で、視野の広いレポートが提出されている（『大正大震災火災誌』所収）。銀座の三原橋近くに、五代目中村歌右衛門らの提唱によって演劇図書館が創設されていたが、これも焼失、東京大学の図書館も災厄を蒙っていた。多くの貴重な資料を個人が管理するのは限界がある、というのが逍遙の博物館構想の出発点をなすわけだが、その際、逍遙自身が手もとに置いていた資料の中で念頭に置いたであろうと思われるのが、大正半ばに画商小林文七から買い入れた大量の役者絵であった。

これをもとに役者絵の整理と研究に乗り出した逍遙は、『芝居絵と豊国及其門下』の中で、演劇資料としての絵画の効能についてを熱っぽく語っている。シェイクスピア学者でもあった逍遙は、エリザベス朝時代の劇場内を描いた絵画がほとんど存在せず、日本の演劇史がいかに豊富な絵画資料に恵まれているか痛感していたのであろう、「世界に類例のないわが芝居絵の価値」という文章も残している。

この逍遙の志に発しているのが、演劇博物館の絵画資料は、すべて演劇を研究するための資料という位置づけである。「写楽が1枚もないようでは」と考えた時代もあって、写楽も1枚だけ購入しているが、写楽1枚の購入費があれば、歌川派をもっとたくさん買うという方針を貫いてきた。そうして積み積もった約47,500枚を、ホームページの「浮世絵データベース」からすべて公開している。演劇博物館のインターネット上の資料公開は、2000年頃からなので極めて早かった。インターネットによって、浮世絵研究は根底的に刷新されたが、役者絵のジャンルでは、その一翼を担ったかと自負するところである。

今回、その一端を展示する機会をいただいたが、ぜひご自宅からでも、複製芸術である浮世絵の、数の威力というものを体感していただきたい。



【図1】初世歌川国貞「二世岩井桑三郎のお軽 三世坂東三津五郎の由良之助 七世片岡仁左衛門の九太夫 七世市川団十郎の平右衛門」  
資料番号：100-0572~0574  
（前期展示予定）  
早稲田大学  
坪内博士記念演劇博物館所蔵

## 変わった経歴の浮世絵師 楊洲周延

楊洲周延(1838-1912)は、幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師です。越後国高田藩(現・新潟県上越市)の下級藩士の家に生まれ、嘉永5年(1852)15歳の頃、歌川国芳(1797-1861)の門人となります。国芳の没後は、歌川国貞(1786-1864)、豊原国周(1835-1900)に師事し、国周門下では最も人気を得た絵師となりました。「千代田の大奥」など、美人画や三枚続の風俗画を得意としました。

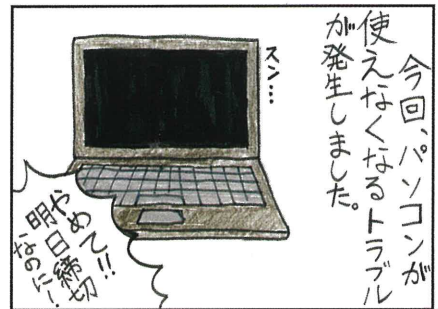
周延は浮世絵師として活躍する一方で、幕末の維新期には幕府側として従軍するという変わった経歴の持ち主です。維新期には各地で新政府軍に抵抗する部隊が起こり、周延は慶応4年(1868)高田藩の有志による神木隊に入ります。上野戦争で彰義隊とともに戦いましたが、新政府軍に敗れました。周延は函館で旧幕府軍に加わり、五稜郭に籠城、明治2年(1869)に降伏し、戊辰戦争が終結します。怪我を負った周延は一時高田藩預かりとなり、謹慎処分などを受けますが、のちに上京して、湯島天神町に居を構え、浮世絵師としての活動を再び開始しました。



【図1】楊洲周延「雪月花 相模 横山の花 照手姫 小栗判官」

【図1】は、周延が手がけた「雪月花」シリーズの一つです。このシリーズは雪月花に形どった枠の中に副題が書かれ、歴史や伝説上の人物とともに、雪景色や月夜、花の咲いている場面

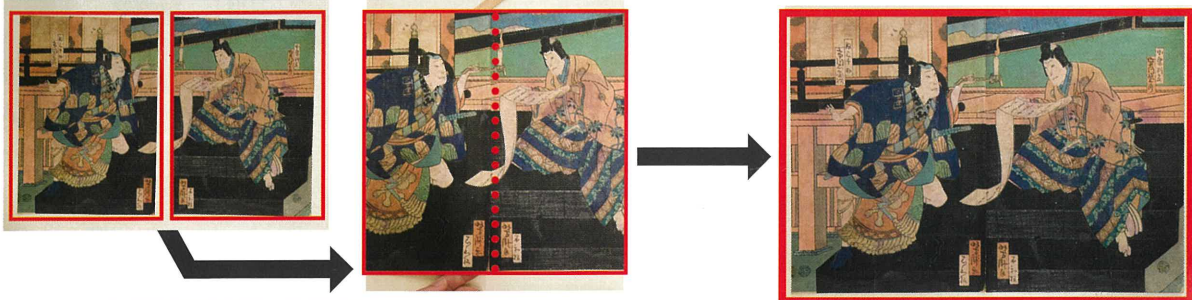
などが描かれています。「雪月花 相模 横山の花 照手姫 小栗判官」では、枠は桜が形どられ、画中には桜が咲いています。花に見立てるほど美しいと評された相模国の照手姫を小栗判官が常陸国からたずねてきた場面などが描かれています。





皆さんは博物館や美術館に行くと、額に入った作品を見る機会が多いと思います。これを額装展示と呼びます。額装の道具の中には、額縁のガラスやアクリルに直接絵がつかないようにする「マット紙」というあて紙があります。浮世絵には「二枚続」や「三枚続」と呼ばれ、一つの絵が二枚や三枚に分かれている作品がありますが、どのようにして額装しているか気になったことはありませんか？今回は、オニカゲ学芸員による、額装作業の一部、「マット合わせ」をご紹介します。

「マット合わせ」とは額装する作品のマットを決定する作業です。今回は二枚続の作品を使って作業を紹介します。最初に、作品保護のため手をきれいに洗います。次に、竹べらを使い、作品内の建物、人物、背景、構図などを参考に二枚の浮世絵をつなげる位置を決めていきます。

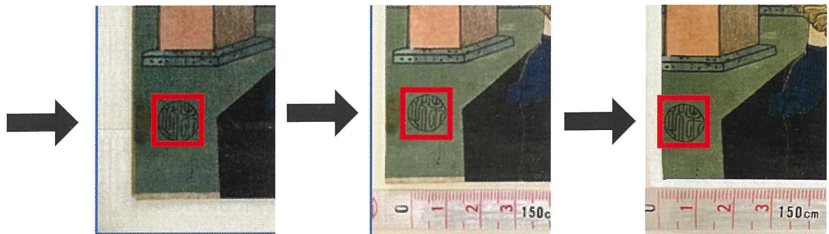


こちらの作品は縁側と巻物の配置を意識しながら、全体のバランスを確認し微調整を行います。

配置はこれで決定！

続いて、二枚を合わせて、作品のタテヨコの寸法を測り、マットの寸法を決めていきます。浮世絵は、江戸時代に作られたものが多く、長年の劣化などもあるため、作品をマットで保護し、サポートすることが必要です。ここでの注意点は、大事な情報が隠れないように微調整をすることです。浮世絵には、描かれた主題以外にも、改印や版元印、落款など、たくさんの二次情報があります。これらも見たいので、なるべくマットで隠れないように意識します。必要な寸法が決まったらマットを切る作業を始めます。額装し、展示室の壁の配置を決め、やっと、皆さんにお見せできる状態となります。マット合わせは作品の見せ方などに影響を与えるため、オニカゲ学芸員も日々奮闘中です。

こちらの作品では汚れと印の位置(「→」の部分)がとても近いため、ミリ単位で調整を行いました。最後の写真では最終的なマットの位置が見えます。



## 編集後記

本展の開催にあたり、貴重な「忠臣蔵」資料をご貸与賜りました早稲田大学坪内博士記念演劇博物館には深く感謝を申し上げます。本展は展示期間を前期・後期と分けるため、準備は大変でしたが、より多くの資料を皆様にお見せできることが楽しみです。ぜひ、前期・後期合わせてご来館ください。

## 編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00(入館は18:30まで)

【休館日】月曜日(祝日、振替休日の場合は翌平日)

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】[藤沢市藤澤浮世絵館](#)で検索🔍

